

## ヒンデミット／組曲「気高き幻想」

パウル・ヒンデミット（1895-1963）は1920年代から「新即物主義」と呼ばれる傾向を推進し、ドイツ音楽を担う若手として評価される。ところが30年代に入ると、彼の現代的な作風や彼のユダヤ人仲間に眉をひそめたナチスが弾圧を始めた。やがてヒンデミットは亡命を決意する。

《気高き幻想》は新たな居住地を求めて、イタリアとスイスで暮らしていた時期に着想された。1937年、フィレンツェでロシア・バレエ団の後継となるモンテカルロ・バレエ団の振付家レオニード・マシーンと出会い、二人でサンタ・クロチェ聖堂に描かれたジョットによる「聖フランチェスコの生涯」をみた。その高い精神性に魅せられた二人は、聖者について書かれたフランス語の本の中から「気高い幻想」というラテン語をタイトルに、バレエの制作に取り組んだのである。

1938年に完成。ロンドンでのバレエ初演ののち、ヒンデミットは11のセクションから選ばれた5曲の音楽を使いながら、3楽章からなる組曲を仕上げた。第1楽章は「たいへん遅く」と記された導入部で始まる。瞑想の場面で、クラリネットと弦合奏が旋律をゆっくりと奏でていく。「中ぐらいの速さで」の主題は弦合奏のユニゾンで始まる自由な Rond 形式。「清貧との結婚式」のシーンの音楽。第2楽章は中世の兵士たちによる「行進曲」と、眠っている聖フランチェスコが崇高な三夫人の幻想をみる「牧歌」からなる。第3楽章「パッサリア」は聖者による太陽への賛歌で、6小節の主題とそれに基づく19の変奏と終曲から構成されている。宗教的な荘厳さと情感の自然な高まりをあわせ持つ作品である。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。